

現俳協・評議員

現代俳句3人3句選アンケート  
句別ランキング

2025年8~9月実施

順位	選句	作者	選句数
1	じゃんけんで負けて蛍に生まれたの	池田澄子	11
	戦争が廊下の奥に立つてゐた	渡邊白泉	11
3	おおかみに螢が一つ付いていた	金子兜太	8
	梅咲いて庭中に青鮫が来ている	金子兜太	8
5	蝶墜ちて大音響の結氷期	富澤赤黄男	7
6	彎曲し火傷し爆心地のマラソン	金子兜太	4
	銀行員等朝より螢光す鳥賊のごとく	金子兜太	4
	人体冷えて東北白い花盛り	金子兜太	4
	広島や卵食ふ時口ひらく	西東三鬼	4
	あやまちはくりかへします秋の暮	三橋敏雄	4
	音楽漂う岸侵しゆく蛇の飢	赤尾兜子	4
	暗闇の眼玉濡さず泳ぐなり	鈴木六林男	4
13	頭の中で白い夏野となつてゐる	高屋窓秋	3
	八月の赤子はいまも宙を蹴る	宇多喜代子	3
	泥かぶるたびに角組み光る蘆	高野ムツオ	3
	少年来る無心に充分に刺すために	阿部完市	3
	国家よりワタクシ大事さくらんば	攝津幸彦	3
	遺品あり岩波文庫『阿部一族』	鈴木六林男	3
	水枕ガバリと寒い海がある	西東三鬼	3
19	黒人街狂女が曳きする半死の亀	野ざらし延男	2
	鉛筆の遺書ならば忘れ易からむ	林田紀音夫	2
	息白く唄ふガス室までの距離	堀田季何	2
	車にも仰臥という死春の月	高野ムツオ	2
	身をそらす虹の/絶巔/処刑台	高柳重信	2
	祈るべき天とおもえど天の病む	石牟礼道子	2
	陽炎より手が出て握り飯掴む	高野ムツオ	2
	天上も淋しからんに燕子花	鈴木六林男	2
	雉子の眸のかうかうとして売られけり	加藤楸邨	2
	白梅や天没地没虚空没	永田耕衣	2
	人類に空爆のある雑煮かな	関悦史	2
	火の奥に牡丹崩るるさまを見つ	加藤楸邨	2
	露地裏を夜汽車と思ふ金魚かな	攝津幸彦	2
	船焼き捨てし/船長は//泳ぐかな	高柳重信	2
	たてよこに富士伸びてゐる夏野かな	桂 信子	2
	たんぽぼのぽぼのあたりが火事ですよ	坪内稔典	2
39	三月の甘納豆のうふふふふ	坪内稔典	2
	算術の少年しのび泣けり夏	西東三鬼	2
	落書に芽の出るような妻と十年	田原千暉	2
	春は曙そろそろ帰ってくれないか	樺未知子	1
	椿一輪からだからああ、出てゆかぬ	鳥居真里子	1
	無方無時無距離砂漠の夜が明けて	津田清子	1
	落椿とは突然に華やげる	稻畠汀子	1

順位	選句	作者	選句数
	夏の河赤き鉄鎖のはし浸る	山口誓子	1
	或る闇は蟲の形をして哭けり	河原枇杷男	1
	蛇がまぐはひ真空に虹また虹	岡井省二	1
	飲食のあと戦争を見る海を見る	吉村毬子	1
	父抜けてゆきし網戸を母も抜け	松井国央	1
	開戦日が来るぞ渋谷の若い人	大牧広	1
	吐瀉のたび身内をミカドアゲハ過ぐ	佐藤鬼房	1
	階段が無くて海鼠の日暮かな	橋 閑石	1
	はじめから烟りでありし冬の姥	中尾壽美子	1
	階段を濡らして昼が来てゐたり	攝津幸彦	1
	ひるすぎの小屋を壊せばみなすすき	安井浩司	1
	還らざる者らあつまり夕空焚く	穴井太	1
	摩天楼より新緑がパセリほど	鷹羽狩行	1
	柿うるる夜は夜もすがら水車	三好 達治	1
	闇凍てて遠くの闇の白らむなり	松澤昭	1
	かくまでももみづれるとは荒蝦夷（「あらえみし」とルビ）	飯島晴子	1
	赤い椿白い椿と落ちにけり	河東碧梧桐	1
	あわれ七ヵ月のいのちの花びらのような骨かな	松尾あつゆき	1
	海を張る七月いよいよ飛ぶか象	杉野一博	1
	かたつむり湖わたらねば目を失う	徳才子青良	1
	夏落葉有髪も禿頭もゆくよ	金子兜太	1
	学校の柳が髪をふりみだす	秋尾敏	1
	なんと気持ちのいい朝だらうああのるどしゅわるつねつがあ	大畠等	1
	枯野ゆく棺のわれふと目覚めずや	寺山修司	1
	八月を展けば神と頭陀袋	京武久美	1
	棺一基四顧茫々と霞みけり	大道寺将司	1
	日が/ 落ちて/山脈といふ/言葉かな	高柳重信	1
	寒椿つひに一日のふところ手	石田波郷	1
	吹きおこる秋風鶴をあゆましむ	石田波郷	1
	カンバスの余白八月十五日	神野紗希	1
	捕手として育ち初冬の俳句詠み	松本勇二	1
	がんばるわなんて言うなよ草の花	坪内稔典	1
	水の地球すこしはなれて春の月	正木ゆう子	1
	暗黒や関東平野に火事一つ	金子兜太	1
	やがてラップに戦場の深い闇がくるぞ	富澤赤黄男	1
	きのうより大きな真昼白山茶花	大坪重治	1
	夜は子の眼しきつめ流冰期	松澤昭	1
	キャバ嬢と見てゐるライバル店の火事	北大路翼	1
	地平より原爆に照らされたき日	渡邊白泉	1
	起立礼着席青葉風過ぎた	神野紗希	1
	貯金しに来てゐる母子チューリップ	轡田進	1
	可惜夜（あたらよ）の桜かくしとなりにけり	齊藤美規	1
	鐵を食ふ鐵バケテリア鐵の中	三橋敏雄	1
	杭のごとく／墓／たちならび／うちこまれ	高柳重信	1
	遠い日の雲呼ぶための夏帽子	大牧広	1
	葛の花来るなと言つたではないか	飯島晴子	1
	とぼとぼと歩き力の要る雪道	五十嵐研三	1

順位	選句	作者	選句数
	雲秋意琴を売らんと横抱きに	中島斌雄	1
	夏の海水兵ひとり紛失す	渡辺白泉	1
	暗い地上へあがつてきたのは俺かも知れぬ	鈴木六林男	1
	何もなし飛弾山中の火打石	津沢マサ子	1
	いくさ数多さりとて虹も無尽蔵	佐怒賀正美	1
	うりずんのたてがみ青くあおく梳く	岸本 マチ子	1
	泉の底に一本の匙夏了る	飯島晴子	1
	えいえんにはるのゆきふる法隆寺	荻原井泉水	1
	軍鼓鳴り 荒涼と 秋の 痒となる（4行）	高柳重信	1
	針は今夜かがやくことがあるだろうか	大井恒行	1
	原爆忌少女のようなお婆さん	鈴木明	1
	火遊びの我れ一人ゐしは枯野かな	大須賀 乙字	1
	原爆許すまじ蟹かつかつと瓦礫あゆむ	金子兜太	1
	冷奴日暮れのギリシャ見ておりぬ	横須賀洋子	1
	鯉老いて真中を行く秋の暮	藤田湘子	1
	灯をともし潤子のやうな小さいランプ	富沢赤黄男	1
	後尾にて車掌は広き枯野に飽く	小川双々子	1
	噴水にはらわたの無き明るさよ	橋間石	1
	凧や馬現れて海の上	松澤 昭	1
	ポーランド三日四日五日間である	阿部完市	1
	虚空より落ちくちなわとなりゆけり	久保純夫	1
	まだ風になれぬ少年青野にいる	成清正之	1
	一月の川一月の谷のなか	飯田龍太	1
	狼をとき放したりわが荒野	岸本マチ子	1
	国籍は月と言い張る兎飼う	堀口孝子	1
	弥陀よ青い葉が青いままで散っている	黒崎溪水	1
	コスモスなどやさしく吹けば死ねないよ	鈴木しづ子	1
	雌ねじから弛みはじめし春の家	安西篤	1
	去年今年貫く棒の如きもの	高濱虚子	1
	山鳩よみればまはりに雪がふる	高屋窓秋	1
	いつせいに柱の燃ゆる都かな	三橋敏雄	1
	雪はしづかにゆたかにはやし屍室	石田波郷	1
	今年また山河凍るを誰も防がず	細谷源二	1
	沖がすみ人のほとんど知り合はず	池田澄子	1
	木の葉ふりやまづいそぐないそぐなよ	加藤 楠邨	1
	父の日や置きっぱなしのじょうろに水	なつ はづき	1
	寂しいは寂しいですと春霰	飯島晴子	1
	海に出て木枯帰るところなし	山口誓子	1
	さまざまの事おもひ出す櫻かな	松尾芭蕉	1
	蝶よ川の向こうの蝶は邪魔ですか	池田澄子	1
	さみしい兄ようムネの泡はいつもあふれる	高木架京	1
	月の道子の言葉掌に置くごとし	飯田龍太	1
	天の川わたるお多福豆一列	加藤楢邨	1
	泥酔われら山脈に似る山脈となれず	高野ムツオ	1
	三月や水をわけゆく風の筋	久保田万太郎	1
	天上のやうに耕しあじめたる	松澤昭	1
	あめんぼと雨とあめんぼと雨と	藤田湘子	1

順位	選句	作者	選句数
	天にオリオン地には我等の足音のみ	楠本憲吉	1
	鹿として怖るべき世に生まれたる	たむらちせい	1
	遠くまで行く秋風とすこし行く	矢島渚男	1
	七人の髭が濃く来る海市かな	大中祥生	1
	栃木にいろいろ雨のたましいもいたり	阿部完市	1
	死にし骨は海に捨つべし沢庵噙む	金子兜太	1
	青柿打ちつづければ輝く放蕩	大石雄介	1
	死は春の空の渚に遊ぶべし	石原八束	1
	夏草に汽罐車の車輪来て止る	山口誓子	1
	写真にはたくさんのは息夏落葉	対馬康子	1
	夏の終わりの有刺鉄線を越える	平山 礼子	1
	愛されずして沖遠く泳ぐなり	藤田湘子	1
	夏の月肺壊えつゝも眠るなる	石橋秀野	1
	出力は無限吹雪の夜の白鳥	高野ムツオ	1
	南国に死して御恩のみなみかぜ	撮津幸彦	1
	春暁や人こそ知らぬ木々の雨	日野 草城	1
	廃墟すぎて蜻蛉の群を眺めやる	原民喜	1
	春雪三日祭の如く過ぎにけり	石田波郷	1
	羽子板の重きが嬉し突かで立つ	長谷川かな女	1
	宇宙さみし一月のコーヒー店	酒井 弘司	1
	はじめに神砂漠を創り私す	津田清子	1
	除染また移染にしかず冬の旅	大井 恒行	1
	八月や生きてるうちにできること	石川まゆみ	1
	白葱のひかりの棒をいま刻む	黒田杏子	1
	花満ちて花散りてこの世つぎの世	黒田杏子	1
	白萩や妻子自害の墓碑ばかり	宮坂静生	1
	春の水とは濡れてゐる水のこと	長谷川櫂	1
	しんしんと肺碧きまで海の旅	篠原 凰作	1
	春はすぐそこだけピアスがちがう	福田若之	1
	美しいデータとさみしいデータに雪	正木ゆう子	1
	飛燕あざやか厄年の釘撃てば曲る	名取思郷	1
	うつくしきあざとあへり能登時雨	飴山實	1
	炎天の遠き帆やわが心の帆	山口誓子	1
	すぐ冰る木賊の前のうすき水	宇佐美魚目	1
	唇顔の見えるひるすぎぱるとがる	加藤郁乎	1
	頭痛の心痛の腰痛のコスモス	金子兜太	1
	朝鳴や女むざむざとは死なぬ	岡本 眇	1
	正視され しかも赤シャツで老いてやる	伊丹三樹彦	1
	風流の初めや奥の田植歌	松尾芭蕉	1
	世界病むを語りつつ林檎裸になる	中村草田男	1
	青き踏めマスクを鳩として放て	夏井いつき	1
	齡來て娶るや寒き夜の崖	佐藤鬼房	1
	文鳥を手に載せ我ら何処へ行くのか	大畑等	1
	林檎の花散るは都の外ならん	大井恒行	1
	ぼうたんのひやくの搖るるは湯のやうに	森澄雄	1
	うつくしきあざとあへり能登時雨	飴山實	1
	星の深さに二階屋低し夜業終ふ	足立雅泉	1

順位	選句	作者	選句数
	若葉には若葉のものゝあはれかな	小林貴子	1
	陰に生る麦尊けれ青山河	佐藤鬼房	1
	底霧や妻には別のバスが来る	瀬川剛一	1
	まだ風になれぬ少年青野にいる	成清正之	1
	空へゆく階段のなし稻の花	田中裕明	1
	麿、変？	高山れおな	1
	空豆にファラオの眉の如きもの	佐怒賀正美	1
	水遊びする子に先生から手紙	田中裕明	1
	體内にとぼそのいくつ梅雨湿り	今野龍二	1
	巨鮫(おおざめ)の腹たぶたぶと曳かれ来る	中村和弘	1
	美しきネオンの中に失職せり	富沢赤黄男	1
	男鹿の荒波黒きは耕す男の眼	金子兜太	1
	七夕やゆびきりをして五十年	細井みち	1
	目つむりいても吾を統ぶ五月の鷹	寺山修司	1
	田の泥の目鼻持たざる涅槃かな	宮坂静生	1
	ものを背負へばいくさめく夜の遠蛙	山口いさを	1
	たましひのたとへば秋のほたるかな	飯田蛇笏	1
	八頭いづこより刃をいるるとも	飯島晴子	1
	たらちねのははそのはは母は羽羽	正木ゆう子	1
	山ひとつ漬したあとの女郎花	宇田喜代子	1
	たわたわと薄氷に乗る鴨の脚	松村 蒼石	1
	夕焼のやうな魚をさげてくる	富澤赤黄男	1
	だんだんと本気になって花の散る	津根元潮	1
	夜霧が漉し飴だったら男女同権を認める	村井和一	1
	乳母車夏怒涛に横向きに	橋本多佳子	1
	万の翅見えて来るなり虫の闇	高野ムツオ	1
	弾力の残る地球を畳あゆむ	佐怒賀正美	1
	地球いま羽落としおり返り花	森田緑郎	1
	咳の子のなぞなぞあそびきりもなや	中村汀女	1
	ローソクもつてみんなはなれてゆきむほん	阿部完市	1
	分け入っても分け入っても青い山	種田山頭火	1
	わがこゑをけふの枯野の最後とす	井沢唯夫	1
	アイスキヤンディー栄養ないし好き	知念ひなた	1
	悪女たらむ氷ことごとく割り歩む	山田みづえ	1
	想像がそつくり一つ棄ててある	阿部青鞋	1
	愛痛きまで雷鳴の蒼樹なり	佐藤鬼房	1
	戦争に注意 白線の内側へ	大井恒行	1
	はんざきの傷くれなゐにひらく夜	飯島晴子	1
	磨崖仏おほむらさきを放ちけり	黒田杏子	1
	天空は生者に深い青鷹 (もろがえり)	宇多喜代子	1